

【研究論文】 イマージョン教育校における地域文化教育 —「しまくとぅば（沖縄方言・言語）」の観点より—

上運天 美都子
日本大学大学院総合社会情報研究科後期課程

東矢 光代
琉球大学

Local Culture Education at an Immersion Program School —Perspective of Shimakutuba (Okinawan dialect) —

KAMIUNTEN Mitoko
Graduate Student at the Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

TOYA Mitsuyo
University of the Ryukyus

In this paper, an immersion school in Okinawa was investigated in relation to Shimakutuba, the dialects spoken in Okinawa. The dialect is viewed as an endangered language by UNESCO and the prefecture has been running promotional campaign to increase its use on the island. Still, the 2020 prefectural survey revealed that the use remained as only 43.2% among the locals. The immersion school has the goal of attaining high English proficiency among its students, it also tries to develop “Glocal” mind by cooperating regional language awareness and cultures into their vision. The survey with a total of 78 students at 8th and 9th grades showed that only 12.8% use Shimakutuba, lower than the prefecture results the year before. On the other hand, the interviews of three teachers in the school illustrated their practices that enhanced the students’ learning of local cultures. One elementary teacher seemed particularly successful as he invited guests from local community, creating occasions where his students must use the language. With the students with backgrounds rather detached from the locals, such practices need to be shared among the school instructors and more research should be conducted to clarify the most effective ways to have students appreciate traditional Okinawan culture and language.

1. はじめに

イマージョン教育とはバイリンガル教育の一種で、「母語とは違う第2言語で通常教科のすべて又は一部を教える教育的試み」（伊東，2007，pp.138-160）である。本稿著者の上運天が勤務するA校では、英語イマージョン教育が実施されており、「Think Global + Act Local = Glocal Citizens（地域に根ざす地球市民）」を幼児・児童・生徒の未来像に据えた、グローバル

教育が特色の一つとされている。A校は沖縄県にあり、学校教育法第1条に定める教育機関として公的認可を得た一条校である。国際色豊かな幼小中一貫校であるA校では、目標言語は英語とされ、国語以外の教科の授業はほとんどが英語で行われ、教師は15カ国から集められている。

このA校の教育効果を検証した大城他（2018）では、イマージョン教育の目標として、1) 高い英語力、

2) 日本語力の保持、3) 学齢にふさわしい教科内容の理解力の獲得に加えて、4) 異言語・文化の尊重と理解、及び、自己のアイデンティティや母文化に対する敬意の念を新たに見いだす社会や文化の多様性を理解する能力の育成の4点が列挙されている。しかし、同稿では、上記目標の3項目までに関してその効果を検証済みだが、4つ目の「社会や文化の多様性を理解する能力の育成」に関する検証はまだ行われていない。そこで本稿ではこの点につき、A校における社会や文化の多様性を理解する能力に関する検証の1つとして、ユネスコが示した沖縄の消滅危機言語である「しまくとぅば」に関する調査の結果を報告する。

ユネスコ（UNESCO：United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、国際連合教育科学文化機関）は、日本国内の消滅危機言語8つのうち5つが沖縄の言語・方言であると発表した（Atlas of the World's Languages in Danger, 2009、文化庁, 2016, 2017, 2018, 2020）。しまくとぅばとは、沖縄の先人たちが生まれ育った地域で使っていたウチナーグチ（沖縄語）で、沖縄県各地で使われてきた全ての言語・方言を意識した語である（石原, 2018）。

A校の生徒（以下、本稿では幼児・児童も含む）のほとんどは、沖縄県内、及び、県外の各地から幼小中学校の10年間を英語イマージョン教育プログラムに参加するためにこの地に集まっている。目標言語である英語圏文化への興味関心は高く、ハロウィンやクリスマスなどのイベントが学校行事としても位置付けられている。

一方、広範囲の地域から時間をかけてA校に通う生徒や県外から移住してきた生徒は、両親や祖先の文化について学ぶ機会が限られ、居住地のコミュニティとの関わりも少ない。生徒たちが将来、世界の中で自らのアイデンティティを顧みる際、自分のルーツにまつわる伝統文化や幼小中学校時期を過ごしている地域の文化を知っていることは、相手の伝統文化に敬意をはらうきっかけになるだろう。そのため、A校の生徒たちが身近な地域の文化や伝統に興味関心をもつことは、他者理解の第一歩であり、検証が必要な社会や文化の多様性を理解する能力の基礎であると考えられる。

若い世代にとっては異文化・異言語ともいえるしまくとぅばが、消滅危機言語であるという事実を踏まえ、A校でのしまくとぅばを教育の可能性を探るため、生徒を対象とした意識アンケート調査と、教員への聞き取り調査を行った。本稿では、これらの結果を基に日本語と英語の2言語教育を目指すイマージョン校でしまくとぅばへの興味関心を示し、理解を促す教育の意義と教育方法の在り方を検討する。

2. しまくとぅばの現状

2.1 沖縄県のしまくとぅば普及推進計画

言語や方言の多様性は、文化遺産として大切に保たれるべきものである。しかし、近年、世界中で多くの言語が消滅しているという現実があり、言語多様性を保つことがますます重要になっている。

沖縄の言語・方言の5つが消滅危機言語である（表1参照）というユネスコの発表（Atlas of the World's Languages in Danger, 2009）を受け、沖縄県では、しまくとぅばの普及継承を目的とし、2013年に「しまくとぅば（沖縄各地の言語や方言、以下略）」の普及推進計10カ年計画を策定した（琉球新報, 2017）。この計画は、「しまくとぅばの日に関する条例」「沖縄県文化芸術振興条例」及び、「沖縄21世紀ビジョン基本計画」に基づいている。県はその推進計画において、しまくとぅばを「あいさつ程度使う」以上の県民を88%にするという目標を掲げた（沖縄県, 2014）。しかし、2020年度調査において、目標には程遠い43.2%という厳しい現状が示された（沖縄県, 2021）。これまでに6回行われた「しまくとぅば県民意識調査」において、しまくとぅば教育の場を学校

表1 日本国内の消滅の危機言語・方言

極めて深刻 (critically endangered)	アイヌ語
重大な危機 (severely endangered)	八重山語（八重山方言）* 与那国語（与那国方言）*
危険 (definitely endangered)	八丈語（八丈方言） 奄美語（奄美方言） 国頭語（国頭方言）* 沖縄語（沖縄方言）* 宮古語（宮古方言）*

（2009年ユネスコ発表データより抜粋し引用）

*は沖縄の言語・方言

に期待する声が高いということが示されているが（沖縄県，2021）、沖縄県の児童生徒がしまくとうばをどう捉えているかについて、継続した調査は行われていない（2021年時点）。

2.2 しまくとうば県民意識調査

「しまくとうば県民意識調査」は、しまくとうばに対する県民の意識や普及の度合いを調査することを目的に、これまで2013、2016、2017、2018、2019、2020年度の6回行われている。調査対象者は沖縄県内在住の18歳（2013年度のみ20歳）～79歳で、初期の2回（2013、2016年度）のみ児童生徒の調査も行われた。データ収集は調査目的や内容を説明して調査票を渡す訪問面接法や訪問留置法¹で行われた²。第6回目調査は、コロナ禍のため郵送による調査表の配布回収を行っていた（沖縄県，2021）。

第1回調査の質問項目は8つで、1) しまくとうばへの親しみ、2) しまくとうばの使用の度合い（使用頻度）、3) しまくとうばの理解度、4) しまくとうばを使う相手、5) 子供達に対する意向、6) しまくとうばの日常生活での必要性、7) 普及させるための方法、及び、8) 自由意見で（沖縄県，2014）、その後は調査時期によって質問項目や文言が多少変化している。

児童生徒対象の第1回調査は2013年度に、小学5年生16,743名、中学2年生16,152名、高校2年生14,923名を対象に、学校内にて実施され、質問項目も一般向けとほぼ同様であった（沖縄県，2014）。2016年度の第2回調査では、質問項目が減り、しまくとうばに対する「親しみ」「理解度」「日常生活での必要性」の3項目のみであった。3項目とも県調査の10代（18歳～19歳）と児童生徒の回答は同傾向で、学年間の差もなかった（沖縄県，2017）。A校の生徒を対象とした本稿の調査では、過去の結果と比較できるように、この県民意識調査の内容を踏襲しているため、項目の詳細は5.4調査結果で述べる。

3. 本研究の背景と研究課題

英語イマージョン教育校A校は、英語教育や国際性を養うことに重点をおいているが、同時に「Think Global + Act Local = Glocal Citizens（地域に根ざす地球市民）」を生徒の未来像に据え、グローバル

教育を特色の一つとしている。地域文化の1つとして今回焦点を当てた「しまくとうば」については、組織的にカリキュラムに組み込んだものではなく、単発での授業取り組みとなっている。例えば上運天が担当する中学部では、9月18日の「しまくとうばの日」に合わせ、県内の大学教授による出張授業³などを行った。また、担当教科である国語授業内での取り組みとして、沖縄県立博物館のデジタルアーカイブ民話（80話）⁴の英語翻訳版を生徒が分担して作成したり、詩の授業の発展として、しまくとうばを入れた詩の創作も行った。小学部では、A校で働くシルバー人材の方々インタビューをした動画や、日本人教師が外国人講師に「しまくとうば」を教えるユニークな講座動画なども作成されているが、これらも単発的な取り組みである。

このような学校環境を踏まえ、本研究では研究課題を以下のように設定した。

1) A校中学生のしまくとうばに対する意識や興味関心を把握する。

2) A校でのしまくとうば教育の現状を把握する。

学校教育にしまくとうば教育の場を期待する県の調査結果、並びに大城他（2018）が示したA校におけるイマージョン教育の4つめの目標である社会や文化の多様性を理解する能力の育成という双方の観点から、しまくとうばに対するA校生徒の意識が、県の調査結果と比較してどのような特徴を持つのかを明らかにする（研究課題1）とともに、教育の主体であるA校教員へのインタビュー調査を通して、彼らの取り組み内容を把握し、しまくとうば教育の重要性への意識を明らかにする（研究課題2）ことを目的とした。これらの結果を踏まえ、A校でのしまくとうば教育が、イマージョン教育の目標の1つである社会や文化の多様性を理解する能力の育成に、どのような貢献をしているかを考察する。

4. しまくとうば意識調査

4.1 参加者

この調査の協力者は、幼小中一貫のイマージョンプログラム教育校A校に在籍する中学2年生（以下、中2とする）35名、及び中学3年生（以下、中3とする）42名の合計78名で、幼稚園や小学校1年生

から英語イマージョンプログラムを開始した初期イマージョン生である。

4.2 調査時期と手続き

調査期間は2021年5月、Google Forms を利用しオンラインで実施した。実施に当たっては調査の回答内容が成績とは無関係であることを生徒に周知した。また個人の情報や回答内容が特定されたり、外部に漏れたりすることがないように倫理的配慮を行う。本調査のデータ使用はA校の倫理審査委員会の許可を得ている。

4.3 調査概要

本調査は「しまくとぅば県民意識調査」の児童生徒版（沖縄県，2014）をもとに Google Forms を作成し、実施した。扱った以下の1) から5) の調査項目は4件法とした。またA校生徒の特徴を知るため、6) 両親の大まかな出身地も調査した。最後に自由記述欄を儲けた。

- 1) しまくとぅばへの「親しみ」
- 2) しまくとぅばの「使用頻度」
- 3) しまくとぅばの「理解度」
- 4) しまくとぅばへの「親しみの有無」と「使用頻度」の関係
- 5) しまくとぅばへの「親しみの有無」と「理解度」の関係
- 6) 両親の大まかな（県・国内外）出身地
- 7) 自由記述

生徒の回答は項目ごとに集計し、調査時期の最も近い2020年度の沖縄県全体の調査（以下、全県）、及び調査対象年代の最も近い10代調査（以下、県10代）の結果と比較した（表2）。

4.4 調査結果

4.4.1 しまくとぅばへの親しみ

表2にしまくとぅばへの「親しみ」の結果についてまとめた。「しまくとぅばに対する親しみ」に関して、「a 親しみを持っている」、または「b どちらかといえば親しみを持っている」（ab の合算、以下「親しみ有り」と回答した者は、全県の結果で84.8%であった。また県10代の「親しみ有り」は58.4%で、両

方とも2013年度の調査開始以来最も高かった（沖縄県，2021）。一方、A中学の「親しみ有り」は35.9%で、全県より48.9ポイント、県10代より22.5ポイント低かった。さらに、「c どちらかといえば親しみを持っていない」、及び「d 親しみが持てない」（cd の合算、以下「親しみ無し」）と回答した生徒が、県10代の28.0%に対し、A校では半数の50.0%となっていた。

表2 比較表-しまくとぅばへの親しみ (%)

しまくとぅばへの親しみ	上段：県全体 n=2021 下段：10代 n=42 (2020年度*)		A校中学部 n=78 (2021年度)	
a 親しみを持っている	50.8	84.8	7.7	35.9
b どちらかといえば親しみを持っている	34.0 39.3		28.2	
c どちらかといえば親しみが持てない	7.0	10.7 28.0	26.9	50.0
d 親しみがもてない	21.4 3.7 6.6		23.1	
e わからない	3.6 11.6	3.6 11.6	14.1	14.1
f 無回答	0.9 2.0	0.9 2.0	0.0	0.0

*第6回（2020年度）全県「しまくとぅば県民意識調査」より引用し抜粋

4.4.2 しまくとぅばの使用頻度

「しまくとぅばの使用頻度」の結果を表3にまとめた。しまくとぅばを「a 主に使う」「b 共通語と同じくらい使う」、及び「c 挨拶程度使う」（abc の合算、以下「使う」と回答した者は全県で43.2%、県10代は23.6%であった（沖縄県，2021）。「d あまり使わない」、及び「e まったく使わない」（de の合算、以下「使わない」）割合は年代が低いほど高くなる傾向があり、県10代で76.4%であった（沖縄県，2021）。A中学の「使わない」と回答したものは87.2%と9割近く、県10代よりさらに高かった。

なお県調査の結果から、「使わない」理由として、年配層では周りに使う相手がいないという回答が多く、60代、70代では標準語の励行により「うまく話せないから」と回答する者もいた。県の若年層では

表3 しまくとうばの使用頻度 (%)

しまくとうばの使用頻度	上段：全県 n=2021 下段：10代 n=42 (2020年度)*		A校中学部 n=78 (2021年度)	
a しまくとうばを主に使う	3.6 5.3	43.2 23.6	0.0	12.8
b しまくとうばと共通語を同じくらい使う	17.7 4.5		0.0	
c 挨拶程度使う	21.9 13.8		12.8	
d あまり使わない	37.0 50.5	55.0 76.4	41.0	87.2
e まったく使わない	18.0 25.9		46.2	
f 無回答	0.0	0.0	0.0	0.0

*第6回(2020年度)全県「しまくとうば県民意識調査」より引用し抜粋

「必要性を感じない」に加え、しまくとうばが「田舎っばい、ヤンキー(不良)っばい、かっこ悪い」など、ネガティブなイメージが持たれていることがあげられていた(沖縄県, 2021)。A校の「使わない」理由には、「普段の生活の中で、しまくとうばを聞く機会は全くない」「しまくとうばという語を知らない」「学ぶ言語は英語だけでいい」などの記述があった。

4.4.3 しまくとうばの理解度

表4に「しまくとうばの理解度」についてまとめた。県の報告によると、2020年度「a よくわかる」、及び「b だいたいわかる」(abの合算、以下「わかる」と回答した者は全県で70.8%となっており、2019年度の前回調査より10ポイント近く増加していた。また県10代は43.4%であった(沖縄県, 2021)。

それに対し、A中学で「わかる」と回答した者は16.7%であった。これは、全県より54.1ポイント低く、県10代より26.7ポイント低かった。「c あまりわからない」、及び「d 全くわからない」(cdの合算、以下「わからない」と回答した県10代は56.6%と約5割、A中学は83.3と約8割であった。

4.4.4 しまくとうばへの「親しみの有無」と「使用頻度」

表5に「親しみの有無」と「使用頻度」の関係についてまとめた。県の報告によると、2020年度全県結果で「しまくとうばを挨拶以上使う」と回答し

表4 しまくとうばの理解度 (%)

しまくとうばの理解度	上段：全県 n=2021 下段：10代 n=42 (2020年度)*		A校中学部 n=78 (2021年度)	
a よくわかる	19.3 5.3	70.8 43.4	1.3	16.7
b だいたいわかる	51.5 38.1		15.4	
c あまりわからない	22.6 40.3	27.6 56.6	55.1	83.3
d 全くわからない	5.0 16.3		28.2	
f 無回答	1.6 0.0	1.6 0.0	0.0	0.0

*第6回(2020年度)全県「しまくとうば県民意識調査」より引用し抜粋

た者は「親しみ有り」と回答した者で49.1%、「親しみ無し」と回答した者では6.5%と40ポイント以上の差があった(沖縄県, 2021)。

A中学の結果でも、「しまくとうばを挨拶以上使う」と回答した者は「親しみ有り」と回答した者で25.9%、「親しみ無し」と回答した者では5.0%と、約26ポイントの差が開いた。また、「親しみ無し」で「使わない(d,eの合算)」と回答した者は、全県が93.1%で、A中学も95.0%と9割以上であった。

表5 親しみの有無と使用頻度の関係 (%)

親しみ有無 × 使用頻度	全県 (%) (2020年度)*				A校中学部 (%) (2021年度)			
	親しみ有り n=1715		親しみ無し n=216		親しみ有り n=27		親しみ無し n=40	
a しまくとうばを主に使う	4.1		2.4		0.0		0.0	
b 共通語と同じくらい使う	20.2	49.1	2.4	6.5	0.0	25.9	0.0	5.0
c 挨拶程度使う	24.8		4.1		25.9		5.0	
d あまり使わない	37.2	48.8	34.9	93.1	59.3	73.1	30.0	95.0
e 全く使わない	11.7		58.2		14.8		65.0	
f 無回答	1.9	1.9	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0

*第6回(2020年度)全県「しまくとうば県民意識調査」より引用し抜粋

4.4.5 しまくとうばへの「親しみの有無」と「理解度」

表6に、「親しみの有無」と「理解度」の関係についてまとめた。県の報告によると、2020年度の全県の調査でしまくとうばが「わかる」と回答した者は、「親しみ有り」と回答した者のうち77.8%であったのに対して「親しみ無し」と回答した者では27.7%と、50ポイント以上の差が見られている（沖縄県、2021）。A中学の結果では、「わかる」と回答した者は、「親しみ有り」と回答した者のうち29.6%、「親しみ無し」と回答した者では10.0%と、約20ポイント差であった。また、「親しみ無し」で「わからない」と回答した者は、全県で7割以上、A中学では9割であった。

表6 親しみの有無と理解度の関係 (%)

親しみ有無 × 理解度	全県 (%) (2020年度) *				A校中学部 (%) (2021年度)			
	親しみ有り n=1715		親しみ無し n=216		親しみ有り n=27		親しみ無し n=40	
a よくわかる	21.8	4.8	3.7	29.6	0.0	10.0		
b だいたいわかる	56.0	22.9	25.9	10.0				
c あまりわからない	19.1	45.1	55.6	70.4	60.0	90.0		
d 全くわからない	1.5	25.9	14.8	30.0				
e 無回答	1.6	1.6	1.3	1.3	0.0	0.0	0.0	

*第6回(2020年度)全県「しまくとうば県民意識調査」より引用し抜粋

A中学の自由記述欄には、祖父が教えてくれるが押しつけ気味である様子の記載があり、この生徒は「親しみ無し」「だいたいわかる」と回答していた。この記述は、本人の意図に関わらず、しまくとうばが家族で話される環境においては、一定程度理解できるようになるケースの存在を示唆していると思われる。

4.4.6 A校におけるしまくとうば意識調査のまとめ

以上の結果をまとめると、以下のようになる。

- (1) しまくとうばに対して「親しみ無し」と回答した者は、県10代で28%であったが、A中学では5割を超えていた(表2)。
- (2) しまくとうばを「使わない」と回答した者は

県10代で76.4%であったのに対し、A中学はさらに増え、約9割にのぼった(表3)。

- (3) しまくとうばが「わからない」と回答した者は、県10代で約5割、A中学部ではさらに高く約8割であった(表4)。
- (4) しまくとうばの「使用頻度」は、しまくとうばへの「親しみ」の有無で大きな差があり、「親しみ有り」と回答した者は「無し」と回答した者より、全県で40ポイント、A中学でも約25ポイント高かった(表5)。
- (5) しまくとうばの「理解度」は、しまくとうばへの「親しみ」の有無で大きな差があり、「親しみ有り」と回答した者は「無し」と回答した者より、全県で50ポイント以上、A中学で約23.5ポイント高かった(表6)。

(1)(2)(3)より、A校中学生は、しまくとうばへの「親しみ」「使用頻度」「理解度」全てが、県10代より低かった。また、(4)(5)より、環境による影響はあるものの、全県の結果と同様、しまくとうばへの「親しみ」があるほど、しまくとうばの「使用頻度」や「理解度」が高いことがわかった。

5. インタビュー調査

5.1 参加者

本調査のインタビュー協力者は、国語、及び、社会科の中学部教師AとB、小学部教師Cで、3人も沖縄県出身の女性で、調査時点では現職であった。

5.2 調査時期と手続き

調査は、一人ひとりと面接する半構造化インタビューで実施した。教師AとCは2021年7月から8月の夏休み中にそれぞれ30分を2回、教師Bは10月の勤務終了後に10分を2回行った。インタビューは録音し、テキスト化したうえで、インタビュー実施時に書き留めたメモと照らし合わせて内容をまとめた。

インタビュー内容の録音は本人の許可を得ており、個人の情報や回答内容が特定されたり外部に漏れたりすることがないように倫理的配慮を行っている。さらに、インタビューを含む収集データの本稿への使用と公表については、文書化した記述内容を提示し

インタビュー協力者、及び、A 校の倫理委員会より許可を得ている。

5.3 調査項目

インタビューの主な質問項目は以下の通りである。

- 1) 出身地や主な居住地
- 2) 主な使用言語
- 3) 主な経歴
- 4) 現在の担当教科、及び、校務分掌
- 5) しまくとぅば関連の地域文化教育の取り組み
- 6) その他

5.4 調査結果

5.4.1 中学教師 A のインタビュー結果

教師 A は中 3 の担任で、中学校社会科を外国人教師と 2 人で担当していた。日本語、英語に加え家庭ではフランス語も使用する 3 言語使用者であり、日英仏語での教材収集能力を活かした多角的視点での授業展開を行っていた。沖縄の芸能・三線で賞を獲得した経歴を持つ。地域文化教育の取り組みに関するインタビュー結果を以下にまとめる。

(1) 地域文化関連教育は慰霊の日などの行事に合わせて取り組んでいるが、限られた時数内で受験対策等を行う必要があるため、単発的な取り組みが多い。

(2) CC (Cross Curriculum: 教科横断的授業、以下略) や (Problem Solved / Project Based Learning 問題解決/プロジェクト型学習、以下略) 等、複数教職員での授業は、刺激的で学びの機会が多いものの、付随するミーティングやエキストラの授業準備・課題確認・評価などに追われている。

(3) ICT 教育環境の整う A 中学は、設立当初より一人 1 台のノートパソコンを生徒に貸与しており、多くの生徒はネット利用のリサーチもプレゼンテーションもそつなくこなしている。しかし、教師が書籍を取り寄せ準備しても、簡単に手に入るネット中心の情報収集で済ませる生徒が多く、深い学びにつながっているのかが気になっている。特に受験生になると課題に雑に取り組む傾向がある。

(4) しまくとぅばに限らず、地域の貧困等、SDGs 関連のアイデアは常にあるが、思い入れが強くなりすぎて、実際の授業には取り入れかねている。

(5) 沖縄に特有の平和学習関連の自主研修やフィールドトリップも今年 (2021 年) はコロナ禍による施設閉館で、実現することができていない。

(6) 正直なところ自分自身がしまくとぅばをほとんど話せず、どのように取り組めばよいかわからない。三線が好きで専門的に学び方言 (しまくとぅば) で歌いコンサートやラジオにも出演してきたが、歌詞の意味を考えたことはほとんどなかった。

5.4.2 中学教師 B のインタビュー結果

インタビュー当時、教師 B は MEXT 英語、国語、家庭科を担当し、中 1 生の担任であった。MEXT とは、文部科学省 (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) を指し、MEXT 英語は文部科学省が実施する英語教育に関する政策やプログラムに沿うように設けられた教科である (文部科学省, 2013, 2016)。A 校ではイマージョン教育の弱点とされる文法事項を補うことや、日本の高校進学の際に不利にならぬよう、週 1 回の MEXT 英語を時間割に組み込んでいる。

教師 B は家庭でも日本語・英語の両言語を使用しており、インタビュー前年度には「しまくとぅば検定試験」の 9 級を子どもと共に受験し合格したという。幼い頃より三線を学び、最近ではサンレレという三線とウクレレから生まれた沖縄の新しい楽器に興味を示し、PBL への活用案を思案中であった。沖縄楽器の演奏だけでなく、地域イベントの司会を務めたり、琉球藍染めを学ぶなど地元の文化活動にも積極的に参加したりしていた。

教師 B からは、Web 上で無料提供される動画アプリケーション Flipgrid 使用の「方言(しまくとぅば)」課題の取り組みが示された。Flipgrid は、A 校の外国人教師よりシェア研修の中で紹介され、主に英語や国語授業で日常的に使われている。インタビュー結果を以下にまとめる。

(1) 国語授業の「言葉 2 方言と共通語」という単元で、普段の授業に「方言で自己紹介！」という課題に対して Flipgrid の使用を組み入れた。A 中学の生徒は内地⁵出身や外国籍が多いので、地域を沖縄に限定せず、両親、祖父母、親戚の方言など、どの地域でも構わない旨を生徒に伝えた。外国籍の生徒に

は、興味のある日本の方言への挑戦を促した。

(2) 沖縄におけるしまくとぅばの危機については、聞いたことがあるかもしれないが、言語保存や継承を意識したことはない。しかし、三線も民謡を歌うのも好きなので、常に身近に「方言」はあり、休み時間などに生徒と歌うこともある。

(3) 沖縄生まれの新しい楽器サンレレを PBL に取り入れて、生徒と一緒に歌いながら取り組むとおもしろいかもしれない。

5.4.3 小学教師 C のインタビュー結果

教師 C は、日本語、英語に加え、家庭では沖縄の離島方言も使用している。学校では、A 校の開校間もない時期から、運動会の演武に沖縄の伝統芸能エイサーを取り入れていた。また、新聞を教材として活用する NIE (Newspaper in Education) を推進し、地元の新聞記者を講師として招くなど児童が地元へ関心を持つ場を継続して提供していた。さらに、台湾の小学校との国際交流プロジェクトを牽引し、双方の文化交流の場で、沖縄の伝統芸能の紹介などを行っていた。インタビュー結果を以下にまとめる。

沖縄では運動会にエイサー演舞を取り入れる学校が増えているが、A 校小学部では学校設立後間もないころから、児童のエイサー演武を運動会で実施しており、教師 C はこの指導の中心を担ってきた。沖縄のエイサーは元々、先祖に捧げる沖縄独特の旧盆の踊りであるが、昨今は若者を惹きつけるモダンな振り付けや華やかな楽曲も多い。しかし教師 C は、継承が危ぶまれた歴史を持つ地元のエイサーにこだわり、地域から講師を招いて演舞指導を受ける機会を、児童に提供していた。

元青年会の講師は、エイサーが先祖に捧げる旧盆の踊りであること、盆入りのウンケー（お迎え）にはじまり、三日目のウークイ（お見送り）の日は、グソー（あの世）で寂しい思いをさせないように盛大な太鼓と踊りで見送ることなどを、踊りや太鼓に交えて伝えていた。地域の歴史にも触れ、沖縄では激しい地上戦があり、特に戦後のエイサーは踊り手の途絶えた地域もあることも話してくれたという。

実際の演舞に向けて、授業だけで補えない部分は、教師たちが地元の夜の練習に参加し踊りや太鼓、沖

縄民謡、へーし（はやし）を習得し生徒に伝授することで、運動会に備えていたという。

(運動会スクリプト)
(51)--市は約 150 年前に生まれた--エイサー発祥の地です。A 校の校内に流れる -- 川の流域の地域には--エイサーが伝統として残っています。特徴はエイサーはもちろん、棒術や獅子まいがあります。今回、初めて棒術に挑戦しました。私たちは、--区青年会の--さんに約 1 か月ご指導していただきました。今日は、--さんのじかた、と言う三線と歌に合わせて心をひとつにして踊ります。どうぞごらん下さい。
(52) Today, we will record for -- this is nursing home in -- area located in -- city. We will greet in Okinawan dialect. We also welcome our special guest, Mr.-- from -- Eisa group, to lead us with his beautiful singing and Sanshin. His role in today's dance is called "Jikata". Please enjoy our performance!
(53) 今日は。--にあります特別老人ホームのおじいさん、おばあさん、スタッフのみなさんにも録画ではありますが、後日わたしたちのエイサーを見ていただきます。
それでは、--のみなさんへ方言であいさつをします。
(54)はいたい！ぐすーよーちゅーうながびら。
わーなーや（名前） やいびーん。
ちゅーや めんそーていー にふえーでーびる。
なまから わったーぬ ぐにんしーぬ エイサーうどういさいびんどー。
わったー ちゅーまでい はまでい エイサーやれんしゅうさんろー。
おじいー、おばあー、んじみそーりよー。
ちゃーがんじゅー しみそーりよー。
はい、なまから はじまいびーん。
ゆたしく おにげーさびら。
(55) We were little bit nervous, but we did our best!
However, in - city, there are many other kinds of traditional Eisa dance in each area.
Also, we would like to continue to learn more about Eisa.
We hope - Eisa will spread to all aver the world through us. Thank you.

図 1 日本語・英語・しまくとぅば混在の運動会スクリプト（抜粋）

インタビューでは、上記のような T 地域の伝統エイサーからの学びによって、児童の中にしまくとうばへの「親しみ」が育まれる過程が語られた。その内容から、地元の人から直接伝統演舞の手ほどきを受け、地元の高齢者に学んだ演舞を披露していくという流れが、小学生にとって馴染みの薄いしまくとうばへの親しみの醸成につながったと考えられる。

2021 年度の運動会で使用された放送台本の一部を示した図 1 を見ると、日本語・英語・しまくとうばが混在している。

同運動会が開催された 6 月はコロナ禍が継続していたため、密を避けるために生徒を学年単位で分割し、さまざまに検討した結果、無観客で運動会を開催することとなった。しかし、同運動会ではオンライン会議サービスの「Zoom」を活用し、老人ホームの方々を招待した。ここにしまくとうばを実際に使う意義を見出すことができる。招待した老人ホーム側は、慣れない Zoom 操作も厭わず快く招待を受けたばかりか、オンライン上での来賓あいさつを、英語を練習した高齢者がかかってでたという。ただ、老人ホームでコロナのクラスターが発生したことから、実際には Zoom での観戦すらかなわず、後日録画ビデオを老人ホームに送る対応をしたということであった。

5.5 インタビュー調査のまとめ

3 名のインタビュー結果から、教師自身の地域文化、方言との関わりの違いにより、学校教育における実践内容にも違いが生まれていた。教師 A は、様々な図書館の遠隔貸し出しシステムを利用し、資料を収集しながら、生徒のプレゼンテーション指導を行ってきた。しかし、自身の知識も少ない地域文化関連教育を、毎年行事としてこなしていくのが精一杯で、それを深めていくことができないというジレンマに悩んでいた。

教師 B の方言自己紹介は、地域を限定せず、かつ自宅で制作できる動画アプリを利用することにより、家族・親戚の協力や参加を促したことで、外部リソースの活用が可能となっていた。インタビュー時点でも教科書に沿って無理せず授業を進めていたが、CC や PBL へのより深い取り入れの手立てを模索中

であった。小学校の教師 C は、地域から学ぶ流れが定着し地元の伝統エイサーを介した老人ホームとの交流で、文化と文化がつながる双方向の活動に手応えを感じていた。

6. 考察

本研究では、消滅の危機的状況にある「しまくとうば」について A 中学の状況を知るために、生徒に対しては「しまくとうば県民意識調査(児童生徒版)」(沖縄県, 2014) を、教師に対しては地域文化教育に関する取り組みについてインタビューを行なった。

意識調査では、A 中学の「親しみ」「使用頻度」「理解度」の全てが、県より極めて低いことが明らかになった。沖縄県(2014, 2017) や石原(2018) は、しまくとうばに対する「親しみ」を醸成することが、言語使用の促進に効果的だと述べている。A 中学においても「親しみの有無」は、「使用頻度」「理解度」の両方に大きな影響を与えていた。一方で、A 中学の約 52% の生徒はしまくとうばに対して「親しみ無し」と回答しており、県 10 代の 28% を大きく上まわっていた(表 2)。

この差の要因を考えてみたい。A 校生徒は沖縄県の全域からスクールバスなどを利用し 1 時間以上かけて通学する者が多く、各々の居住地において地域と関わる時間が少ない。また、教師 B が授業時に配慮したように、県外や海外出身の親を持つ生徒が多い。両親、または両親のいずれかが県内、または海外出身の親を持つ生徒は、中 2、3 で 6 割を超えていた(表 7)。

表 7 A 校中学 2、3 年生徒の両親の出身地(主な居住地) 別人数と割合(2021 年 6 月)

両親	両親とも 県内	いずれか が県外	両親とも 県外か外国
人数	29 人	18 人	31 人
%	37.2%	23.1%	39.7%

* n = 78

中学部の教職員も同様で、63.0% が県外や海外出身者である(表 8)。さらに、学校の公用語は英語で、しまくとうばのみならず日本語に触れる場面が限られており、地域・家庭・学校においてしまくとうばとの接点を持たない生徒がほとんどだと考えられる。

表 8 A 校中学教師の出身地（主な居住地）
（2021 年 6 月）

教師	県内	県外	外国
人数	4 人	3 人	4 人
%	36.4%	27.3%	36.4%

*n=11

表 9 では、生徒を両親の出身地別に 3 つのグループ（両方県内、いずれかが県内、両方県外）に分類し、対象者の「しまくとうばへの親しみ」の回答（表 2 参照）を、「親しみを持っている（4 点）」「どちらかといえば親しみを持っている（3 点）」「どちらかといえば親しみを持っていない（2 点）」「親しみが持てない（1 点）」として、グループごとの平均点と標準偏差を算出した。なお、「わからない」の 11 名（「無回答」はなし）は分析から除外したため、有効データ数は 67 名となり、これまでの表とは異なる。

表 9 A 校中学 2、3 年生徒の両親の出身地（主な居住地）別の「しまくとうばへの親しみ」の回答結果（2021 年 6 月）

	両親県内	いずれかが県内	両親とも県外か外国
データ数*	26 人	14 人	27 人
平均	2.81	2.00	1.78
標準偏差	0.80	0.78	0.89

*「わからない」「無回答」の回答者を除く（n=67）

さらに、グループ間の平均値に有意な差が存在するかどうかを、一元配置分散分析（ANOVA）を用いて検証した。その結果、分散比（F 値）は 10.69、p 値が 1%以下と有意な結果となった。さらに多重比較（Bonferroni 法）を行なったところ、有意差は両親県内と両親県外・外国との間（ $p < 0.001$ ）及び、両親県内といずれかが県内との間（ $p = 0.0015$ ）に見られたが、いずれかが県内と両親とも県外・外国との間には有意差が見られなかった（ $p = 1.00$ ）。このことから、生徒の両親の出身地という属性が、しまくとうばへの親しみの感じ方に影響を与えていることが示唆された。特に両親とも出身地・居住地が沖縄県内である場合とそうでない場合に、その差が顕著であることがわかった。

一方で、今回インタビューした 3 名の教師は全員、児童生徒に地域文化について学んでほしいという思

いを強く持っていた。中学部教師 A は、地元の様々な課題解決に向けての思い入れをインタビューで述べており、教師 B は今後の方策を練っていた。また教師 B、C は多様な背景を持つ生徒が集うイマージョン校の強みを生かしている。特に教師 C の語った運動会での伝統エイサーの指導実践は、地域の歴史・文化のより深い理解につながるものであるし、3 言語で行う運動会では、しまくとうばが生きた言語として使用されている。しまくとうばそのものを学ぶ目的の言語教育ではないが、実際に言語が使われる場面とコミュニケーション相手の設定は、しまくとうばへの親しみを向上させるのに一定の効果があるのではないだろうか。ここでは、この取り組みについてより詳しく分析する。

A 校小学部（以下、A 小学）では、地域講師を招き、エイサー練習を通してしまくとうばに触れる状況を作っていた（input）。運動会では保護者や地域の老人ホームへ、国際交流プロジェクトでは海外に向けて「日・英・しまくとうば」の 3 言語を添えた演舞披露を行っていた（output）。

A 中学では、教師 A の取り組みに見られるように、日英両言語でウェブサイトや文献からしまくとうばなどに関する沖縄の歴史や文化をリサーチし（input）、英語でのレポートやプレゼンテーションとして発表する活動を行っていた（output）。また、教師 B の取り組みは Flipgrid を利用して、しまくとうば（方言）発話の動画（output）の課題提出であった。つまり、A 小学が地域との触れ合いの中で演舞を練習しながらしまくとうばを input していくのに対し、A 中学はインターネットや本からの input が主であった。また、A 小学が運動会などで、保護者や老人ホームに向けて双方向で output しているのに対し、A 中学は学校内の課題として output が完結していた。しまくとうばのような馴染みの薄い言語に対する親しみを醸成するには、A 小学の実践のように、他者と関わりながら input や output を行うことが効果的であると思われる。

嘉手納町で 2022 年に開催された「しまくとうば復権シンポジウム」⁶では、専門家の示したハワイ語復興の例などに学ぶ提言があった。松原（2006）は、ハワイ語イマージョン校の卒業生のハワイ語保持・活

用に関する現地調査を行い、国内外の少数言語復活の視点を提供している。その中でも特に、多くの若者の心を魅了するハワイ音楽やフラの果たす役割に着目している。沖縄の伝統芸能エイサーも、県内の若者や子どもたちを魅了してやまない地元の旧盆の風物詩である。この観点からも、伝統的な踊り・行事をしまくとうば教育と組み合わせた A 小学の方策は、効果的な事例のひとつと言えよう。

7. まとめと今後の課題

本研究では、消滅の危機的状況にある「しまくとうば」について、イマージョン校である A 中学の生徒は、県内の 10 代に比べて関心が低いことが意識調査から示された。そのような中、学校教育における取組としては、教師インタビューより、小学部の伝統芸能エイサー演舞の取り組みのように、他者と関わる双方向の input - output で言語を使う場を設定していた。A 校では、特に県外や外国出身の両親の割合が多く、しまくとうばとの接点が少ないという背景を踏まえ、双方向の input - output の機会を設けることが、しまくとうばへの親しみやモチベーションを高めていく可能性が示唆された。

大城他 (2018) の示した A 校のイマージョン教育の目標は、(1) 高い英語力、(2) 日本語力の保持、(3) 学齢にふさわしい教科内容理解力の獲得に加えて (4) 異なった言語・文化の尊重と理解、及び、自己のアイデンティティや母文化に対する敬意の念を新たに見いだす社会や文化の多様性を理解する能力の育成であった。A 校においてしまくとうば教育を行う意義は、大城他 (2018) の示したイマージョン教育の 4 つ目の目標「社会や文化の多様性を理解する能力の育成」に向けて、母語・母文化を含む全ての言語や文化に新たな視点を持つことだと言えよう。

この観点から、本調査の結果、「しまくとうばへの親しみ」が低い A 校において、より地域の第三者を巻き込んだ取り組みが、特に A 中学において望ましいと考えられる。A 小学のように伝統エイサー、あるいは伝統音楽や文化を取り入れることで、しまくとうばに自然に触れることができる。しまくとうば教育については、A 校の多様性を活かし、新たな視点で母文化を含む多様な言語文化に敬意の念を見出

すような社会や文化の多様性を理解する能力の育成 (大城, 2016) への寄与が期待される。

今後は、A 校のグローバル教育を再考し、地元根付くイマージョン教育校として、生徒たちが Glocal Citizens (地域に根ざす地球市民) として、この地から英語力やバイリンガル能力を活かして何が発信できるのかを議論していくことが望まれる。集まった県外や国外にルーツをもつ仲間たちとの学校生活を生かし、英語も日本語もしまくとうばも含めた各地の多様な言語や文化に敬意を向け、様々な人々の母文化を発見し語り合う場を創り出していくことが、次世代に求められるバイリンガル像だと考える。

注

1. 調査目的や内容を説明して調査票を渡し、後日再訪問して回答を回収する方法。
2. 訪問面接法、訪問留置法とも、労力を要するがデータの回収率を上げることができる。
3. しまくとうばから英語まで 琉大トリオが届けるおもしろ話「異文化は楽しい！」<https://w3.u-ryukyu.ac.jp/tonga/trail.html> (2023 年 5 月 5 日閲覧)
4. 「うちなー民話の部屋」沖縄県立博物館・美術館 (おきみゅー) <https://okimu.jp/museum/minwa/> (2023 年 5 月 5 日閲覧)
5. 沖縄では、沖縄や北海道を除いた地域のことを一般に「内地」や「本土」という言い方をする。また「内地」の人のことを「ナイチャー」という。地元の人多くは親しみを込めて「ナイチャー」という言葉を使っているが、違和感を感じている県外出身の人もある。
6. しまくとうばの復権シンポジウム <https://fmnirai.tida.net/e11725573.html> (2023 年 5 月 5 日閲覧)

引用文献

- 文化庁 (2016) 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究報告書』
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jitchichosa/index.html
 (2023 年 5 月 5 日閲覧)

- 文化庁 (2017) 「シマジマのしまくとうば」『危機的な方言・言語に関する研究』 <https://riis.skr.u-ryukyu.ac.jp/kikgengo/about/> (2023年5月5日閲覧)
- 文化庁 (2018) 『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究報告書』 https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jitchichosa/index.html (2023年5月5日閲覧)
- 文化庁 (2020) 「シマジマのしまくとうば」『令和元年度 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究 報告書』, https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jitchichosa/pdf/92219201_01.pdf (2023年5月5日閲覧)
- Flipgrid <https://info.flipgrid.com/getting-started.html> (2023年5月5日閲覧)
- 石原昌英 (2018) 「しまくとうば劇の効果について」『平成29年度文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」報告書』 pp.242-253. https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jitchichosa/pdf/r1396193_01.pdf (2023年5月5日閲覧)
- 伊東治己 (2007) 「カナダのイマージョン教育の成功を支えた教授学的要因に関する研究」『鳴門教育大学研究紀要』 22号, pp.138-160.
- 松原好次 (2006) 「ハワイ語再活性化運動の現況—ナーヴァヒー校卒業生に対する追跡調査報告—」 電気通信大学紀要 19巻1・2合併号 pp.117-128
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf (2023年5月5日閲覧)
- 文部科学省 (2016) 「文部科学省の概要 (パンフレット)」 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/09/20/1377224_1.pdf (2023年5月5日閲覧)
- 沖縄県 (2014) 『平成26年度しまくとうば県民運動推進事業 県民意識調査 (報告書)』 <https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/documents/kenminnisikityousah25.pdf> (2023年5月5日閲覧)
- 沖縄県 (2017) 『平成28年度しまくとうば県民意識調査 報告書』 <https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/documents/kenminishiki.pdf> (2023年5月5日閲覧)
- 沖縄県 (2019) 『平成30年度しまくとうば県民意識調査 報告書』 https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/documents/shimakutwuba_kenminishikichosa_h30.pdf (2023年5月5日閲覧)
- 沖縄県 (2021) 『令和2年度しまくとうば県民意識調査・報告書』 <https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/r2simakutolubakenminisikityousa.html> (2023年5月5日閲覧)
- 沖縄県 (2022) 『令和4年度しまくとうば県民意識調査 報告書』 <https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/bunka-sports/bunka/20220524shimakuttuba.html> (2023年5月5日閲覧)
- 大城賢・東矢光代・深澤真 (2018) 「日本における英語イマージョン教育の成果と課題 ～沖縄アミークス国際学園の事例～」報告書
- 琉球新報 (2017) 『沖縄県民意識調査報告書2016』 琉球新報社
- UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger [unesco.org http://www.unesco.org/languages-atlas/](http://www.unesco.org/languages-atlas/) (2023年5月5日閲覧)

(Received: August 20, 2023)

(Issued in internet Edition: September 1, 2023)